

分布：全国

オオジシバリ (キク科)

学名: *Ixeris japonica*

別名：ツルニガナ(蔓苦菜)、ジシバリ、這い地縛り、岩ニガナ

主な生育場所

田や畑の畦畔、休耕田、路傍、草地、樹園地、土手、原野などに生える。日当たりが良く、やや湿った場所を好む。最もよく見られるのは水田の畦畔で、伝統的な畦の植生を代表する草花の一つ。

特徴

多年生。根出葉を放射状に広げ、細い茎を地表あるいは浅い地中に長く四方に伸ばす。茎の節から葉や根を下ろし、長い柄の葉は互生し浅くまばらな鋸歯がある。葉や茎の切り口から出る白い乳液は苦い。葉脇から伸びる花茎は高さ20cmほどでタンポポに似た径約3cmの頭花を2~3つける。皮針形のそう果は長い冠毛をもつ。



名前の由来：細長いほふく茎で地面を這って広がっていく様子が、まるで地面を縛っているようだと地縛り。類似の地縛り(イワニガナ)より花や葉ががが大きくなることから、大地縛り。

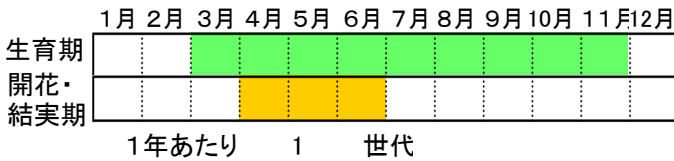
<農業との関係>

成長点が低い位置にあるため、草刈りに強く、また被陰には弱いので、刈り払い機などで適切に管理されている水田畦畔で多くなる。除草剤を多用する畦や基盤整備直後に造成された畦畔では見かけることが少なく、伝統的な畦草刈りによる管理の指標となる。耕起には弱いので、水田や畑地内に入るとはほとんどないが、耕起管理が少ない樹園地などではやっかいな雑草となることがある。



花後にタンポポに似た冠毛をもつ種子をつける。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> タンポポ類は匍匐茎を伸ばさず、花茎につく花は一つ。やや乾いた場所にも生えるイワニガナはオオジシバリ同様に地面を這って四方に広がるが、全体小型で葉は広卵形、花の大きさは径2~2.5cmほど。

<一言うちく>

オオジシバリは春から初夏にかけて花数が多く、ミツバチなどの蜜源としても貢献しています。しかし、かつては各地の水田の畦にありふれた花でしたが、コンクリート畦の増加や除草剤による管理が増えたため、最近ほとんど見かけることが少なくなってしまった地域もあるようです。



花は舌状花のみからなり、中央に黒っぽい雄しべがよく目立つ。

<人との関わり合い>

全体に苦みがあるが、若葉は「苦み菜」として食べることができる。開花期に全草を採取し、よく洗った後に日干ししたものは生薬名で剪刀股(せんとうこ)と呼ばれ、健胃、消炎、解熱に効能がある。健胃薬としては、センブリの代用となる。また、蓄膿症にも効果があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：設定なし】

春から夏にかけて水田まわりでよく見かける花にかかわらず、意外だが、季語の設定もなく、これまで短歌や俳句に登場することはなかったようである。